

スジアラ種苗生産技術開発

企画・栽培養殖部 主任研究員 今吉 雄二

<目的>

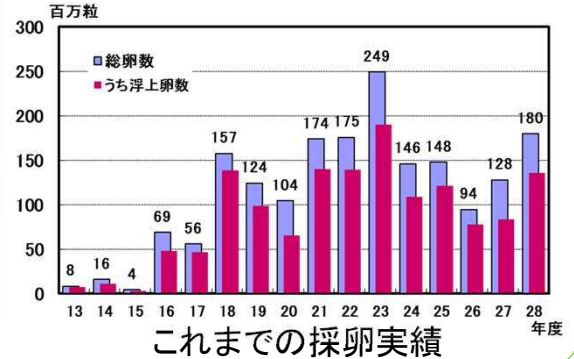
奄美海域において、放流対象魚種として最も重要視されているスジアラの安定した種苗量産技術を確立する。

<親魚養成>

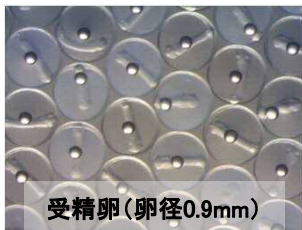
- 種苗生産用の受精卵確保
 - ・若齢個体の追加
 - ・老齢、健康状態の悪い個体の処分
- ほぼ毎年、1億粒超の採卵実績



200KL水槽内の親魚



<種苗生産>



受精卵(卵径0.9mm)



ふ化仔魚(全長2.2mm)



日齢15(全長6.9mm)



日齢64(全長40mm)

- 現時点で、安定した量産技術確立には至らず。不安定な初期生残率、餌料切替時の大量斃死等の課題が未解決。

○平成28年度は、主に以下の2つの点を改善。5年ぶりに5万尾台の生産を実現した。

(1) 卵収容時の通気量減少

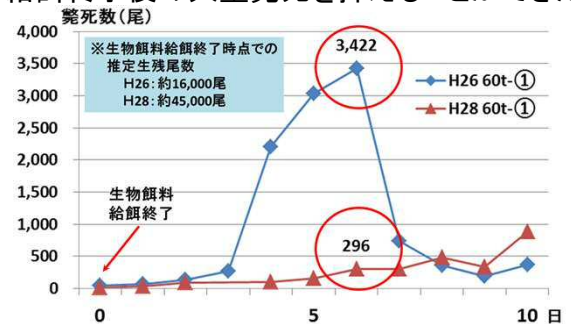
卵収容時の通気量を、従来の5L/分×6カ所から0.5L/分×6カ所に減らしたことにより、物理的障害が減り、初期生残率が安定した可能性。

27年度	試験水槽	日齢10での生残率(%)
1R	20t-①	42.8
	20t-②	21.3
2R	60t-①	1.7
	60t-②	3.2
3R	20t-①	9.7
	20t-②	10.0

28年度	試験水槽	日齢10での生残率(%)
1R	20t-①	29.0
	20t-②	22.1
2R	60t-①	12.3
	60t-②	19.1

(2) 生物餌料の給餌期間延長

成長の遅い個体の摂餌機会増がねらい。生物餌料給餌終了後の大量斃死を抑えることができた。



<29年度の結果と今後の課題>

○飼育水槽による生産尾数のバラつき

60t-①: 21,509尾 → 28年度手法の再現性確認
60t-②: 6,668尾

○生物餌料から配合飼料への切り替えの失敗

・60t-②では、配合飼料摂餌率が急落
80%(日齢32)→0%(日齢37)

・日齢12での推定生残数

28年度60t-① ≒ 81,000尾

29年度60t-② ≒ 50,000尾

→生残数の差を考慮せず、再現性にこだわるあまり、

同量のアルテミアを給餌した結果、残アルテミアの発生

※推定生残数に合わせた生物餌料給餌量の調整

